JR西日本あんしん社会財団

2021年度 小・中学生

「いのち」の作文コンクール

©Moe Nagata

作品集

さくひんしゅう

JR西日本あんしん社会財団　2021年度小・中学生「いのち」の作文コンクール　作品集

公益財団法人 JR西日本あんしん社会財団
JR-West Relief Foundation

ごあいさつ

公益財団法人　ＪＲ西日本あんしん社会財団
理事長　来島 達夫

当財団は、２００５年にＪＲ西日本が惹き起こした福知山線列車事故の反省から設立された財団で、設立以来「いのち」や「こころ」、「安全」をテーマに様々な活動を行っております。

本コンクールは、作文を通じて「いのち」を大切にする安全で安心できる社会づくりにつなげていきたいとの思いを込め、将来を担う小・中学生の皆さんを対象に募集させていただいており、３回目となる今回は９千を超える多くの小・中学生の皆さんにご応募いただきました。

身近な「いのち」の始まりや終わりをテーマにした作品に加え、コロナ禍の暮らしや様々な社会問題をテーマにした作品など、皆さんが「いのち」の大切さについて真剣に向き合われたと感じるものが大変多く、私ども大人も大いに学ばせていただいたと強く感じているところです。

コンクールの実施にあたり、ご指導いただきました学校関係者の皆様、並びにご家族の皆様ほか、多くの方からのご協力を賜り、厚く御礼申し上げます。

本作品集への掲載は、ご応募いただいた作品の一部ですが、小・中学生の皆さんはもちろん、多くの方に「いのち」について考えるきっかけにしていただければ幸いです。

目次

CONTENTS

●いのちの作文大賞（4名）…… 4

●優秀賞・選考委員長賞（5名）…… 22

●優秀賞（21名）…… 34

●入選（70名）…… 62

●選考を終えて…… 68

いのちの作文大賞（小学生　一・二年生）

「クモジイ」

私立智辯学園和歌山小学校　二年二組　延與　晟一良

ぼくの家のげんかんのイヌビワの木に、一ぴきの足長グモがすんでいました。いつも、はっぱのかげから、えものがわなにかかるのをじっとまっています。ぼくは、そのクモにクモジイと名前をつけました。クモジイは、門とうのあかりにとんできた虫をつかまえて食べます。クモジイの体はどんどん大きくなって、すもどんどん大きくなりました。

ある日の朝、げんかんから「きゃあ！」という声が聞こえました。お母さんが、「こんなところにすをはって！」とおこっています。クモジイが、イヌビワの木から僕の家の台どころのあみ戸に大きなすをはったので、お母さんが引っかかってしまいました。

つぎの日の朝、またお母さんの「きゃあ！」という声が聞こえました。クモジイがまた同じ場しょにすをはったので、またお母さんが引っかかりました。そのつぎの日の朝、ぼくはお母さんより先に外に出ました。クモジイは、また同じ場しょにすをはっていました。

ぼくは、お母さんに、「クモジイのすがあるから気をつけて！」と言いました。そしたら、お母さんは、ほうきでクモジイのすをこわしてしまいました。ほうきの先にしがみついていたクモジイは、地面にふりおとされてしまいました。ぼくが「かわいそう。」と言うと、お母さんは、「クモは生めい力が強いから大じょうぶ。いのちがあるかぎり、生きようとするから。」と言いました。その日の夕方クモジイは新しいすをはって、えものがくるのをじっとまっていました。すをこわされてもこわされても、新しいすをはって、生きようとするクモジイはすごいと思いました。

つゆに入って、大雨がふって嵐が来ました。つぎの日、クモジイはいなくなっていました。

いのちの作文大賞（小学生　一・二年生）

すもなくなっていました。つぎの日も、そのつぎの日も、クモジイがすをはることはありませんでした。ぼくは、イヌビワの木を見ると、一生けんめい生きていたクモジイのことを思い出します。

講評

玄関先に巣を張り巧みに獲物をとらえ成長するクモに、「クモジイ」と名付け見守りつつ、何度取りのぞいても巣を張るクモの生命力への圧倒されるような感動がつづられている。巣を取りのぞくという「動」と、再び巣を張り獲物を待つ「静」の繰り返しにより生まれる文章のリズム感とともに、たくましいクモジイの様子が手に取るように描かれており、何気ない日常で見つけたいのちの躍動感にあふれた作品である。

いのちの作文大賞（小学生 三・四年生）

「つながる命」

西宮市立東山台小学校　四年三組　合田　奈々子

「むかしのくらししらべ」で、お母さんが

「ひいおじいちゃんとひいおばあちゃんのけっこん式の写真よ」

と言って見せてくれたのは、こわれた家、ひしゃげたパイプ、くずれた石がき、そして着物を着た男の人と女の人が写っている、茶色い写真でした。大きなケーキもきれいな花もかわいいぬいぐるみもありません。

「なにこれ」

想像していたものとは全然ちがいました。

「原爆が落ちたすぐあとだったからね」

それからお母さんは、何十年も前、戦争をしていた日本に原爆が落ちたこと、ひいおばあちゃんは長崎の原爆落下中心地のすぐ近くで働いていたこと、本当にたくさんの人が死んだ中で、なんとか助かったひいおばあちゃんが、ひいおじいちゃんとあの写真の場所でけっこん式をあげたことを話してくれました。

戦争や原爆のことはなんとなく知っていたけれど、こんなに私の身近なものだったなんて知りませんでした。もしこのけっこん式がなかったら……。少しこわくなりました。でも、原爆の落ちた長崎で、ひいおじいちゃんとひいおばあちゃんが必死に生きてきたこと、そこからおばあちゃんが産まれて、お母さんが産まれて、そして私が産まれて。当たり前だと思っていたことが、とても不思議なもののように思えてきました。

もう何年も前に、ひいおじいちゃんとひいおばあちゃんになるまで生きて死んだ二人に、私は心の中で「ありがとう」と言いました。

そして、ひいおばあちゃんたちがつなげてきたのと同じように、いつかどこかへつながっ

いのちの作文大賞（小学生 三・四年生）

ていくかもしれない私の命。ずっと遠い未来で、顔も知らないだれかに「ありがとう」と言ってもらえるかもしれない私の命を、大切にしていきたいと思いました。

講評

原爆投下の焼け野原をバックに撮った曾祖父母の結婚写真を見て、大変な状況下で必死に生きのびて、私に命をつないでくれたいのちのリレーを感じ、命を大切にすると誓う作品。1枚の写真から、身近な人がその瞬間を生きてきたことを知り、知識としてだけだった戦争や原爆への捉え方に変化が生まれてきている。そして、そこにとどまらず、遠い未来の知らない誰かにまで想いをはせている。まさにつながるいのちであり、レベルの高さを感じる。

いのちの作文大賞（小学生　五・六年生）

「天国ハウス計画」

箕面市立中小学校　五年一組　金本　一椛

ある日、わたしとお母さんと妹の三人で生まれ変わったら何になりたいか話していた。

わたしは、

「鳥になって空を飛びたいな。」

と言った。妹は、

「かわいいねこになりたいな。」

と言った。お母さんは、少し考えて、

「この地球には生まれずに、ずっと天国で幸せにくらすのはどうかな?」

と言った。わたしは、それもいいなと思った。なぜなら、天国では、病気になって苦しんだり、大切な人を失って悲しむこともないはずだから。そこで、もし天国でくらすとしたら、どんな家で、どんなくらしをするのがいいか考えてみることにした。

次の日、妹と倉庫からダンボール箱をたくさんとり出してきた。昨日話していた天国ハウスを作るためだ。天国ハウスには部屋がいくつもある。温泉、プール、畑も付いている。まさにゆめのような家だ。家族四人の人形も作った。人形で遊んでいるとき、わたしは、ふと思った。だれが初めに天国へ行ってしまうのかと。年れいの順番からすると、一番初めにお父さん、二番目にお母さん、その次にわたし、最後が妹。けれども、明日だれかとつぜん天国へ行ってしまうかもしれない。そう思うと悲しくなってきた。なみだをこぼさないように必死にこらえていると、

「この話、もうやめようよ。」

と妹が言った。きっと、妹も同じ気持ちだったのだろう。天国ハウス計画は楽しいけれど、少しこわくもある、不思議な話だった。

いのちの作文大賞（小学生　五・六年生）

その日の夜、ベットの中で命について考えた。命ってなんだろう？わたしの体が死んだあと、ちゃんと天国に行けるかな？天国と地ごくってどこにあるのかな？

よく朝起きたら、お母さんはいつもどおり、あわただしく朝ごはんの用意をしながら、妹の音読を聞いていた。洗めん所からお父さんのひげそりの音が聞こえてくる。いつもと同じ朝の風景を見て何だかとてもほっとした。こうしていつもと同じ朝が来るのはきせきで、毎日、いっしょうけんめい生きようと思った。

講評

「生まれ変わったら？」をテーマに、家族で始めた会話で意気投合した天国ハウス計画。夢のような家づくりなど発想はどんどん広がるも、死を前提としている計画であることに気づき急ぎ現実に戻ろうとする。一度は想像の夢を膨らませたことへのばつの悪さ、そこからどう逃げ出そうかという心の動き、そして何でもない朝が幸せだという着地点が見つかった安堵感などがよく描けている。いつもの朝のさりげない端的な描写表現も素晴らしい。

いのちの作文大賞（中学生）

「二人ではじいたそろばん」

私立滝川第二中学校　一年二組　空閑　桜佑

「あいつ、死んだよ。」

そろばん教室に入った僕に友達がそう言った。

「冗談やめろ。」

と僕は笑った。小学四年の冬のある日の事だった。僕は五歳の頃からそろばんを習っていて、四年生の時は父の転勤先の大分県でとても厳しいそろばん教室に通っていた。それなりに上手だと自負していたのに、その教室の選手クラスに入ると選手のはじくスピードに全くついていけず、教室では底辺中の底辺。他の選手からは、笑われたりバカにされたりで、そろばんが全く楽しくなくなってしまっていた。いつか見返してやる！そう思って練習しても、どんなに努力しても、いつまでたっても追いつくことができなかった。そんなゆううつな習い事をやめずに続けていたのは、一人の友達がいたからだった。彼の名前は〇君。〇君は僕と同じくらいの腕前で、笑顔がかわいい奴だった。〇君と僕はペアで、いつも互いに採点をし合って上手になろうと頑張っていた。

ある日、僕達二人に大きなチャンスがやってきた。日本中の最強のそろばん選手が参加する合宿に、僕達二人も参加して良いと先生からの許可が出たのだ。ぼくは力を認めてもらえたようでうれしい反面、ついていけるわけがないという不安も大きかった。だけど〇君がいたから一人じゃないんだと思えて勇気を出す事ができた。〇君と二人で申し込みをし、新幹線に一緒に座ろうね、ご飯一緒に食べようねとわくわくしながら合宿の日を待っていた。そんな時にあの冗談を聞いたのだ。

「冗談やめろ。」

と言った僕に先生が

「本当だよ。〇君は亡くなりました。」

と悲しそうに告げた。僕の頭は真っ白になった。うそだ、先週一緒にそろばんをはじいたじゃないか！帰りにブランコに乗ったじゃないか！信じられなかった。だけど本当に〇君はその日から教室に来ることが無かった。〇君はインフルエンザで高熱が出て、亡くなってしまったと知った。

〇君がいないまま合宿の日が来た。僕はあまり行きたくなかった。だけど〇君のお母さんが、

「〇は合宿に行くのを楽しみにしていたんだよ。」

と言っているのを聞き、〇君が行きたくても行けなかったのに、僕が逃げて参加しないのは〇君への裏切りになると思い、行く事にした。大阪のホテルを貸し切って日本一の選手が集まる合宿が始まった。朝の九時から夕方六時までそろばんをはじきまくる。毎回採点し、順位がはり出される。順位が悪いと、席がどんどん後ろに下がっていく。頑張っても頑張っても周りのレベルに追いつけない。苦しい時間が過ぎていった。合宿が後半戦になった頃不思議な事が起こった。疲れ切っていたはずの指がなぜか軽く速く動き出した。僕はその時、〇君がそばにいるような気がしたのだ。

「桜佑がんばれ！あきらめるな！」

そう応援してくれているように感じた。それはまさに、二人ではじいたそろばんだった。そして合宿は終わった。

僕はその後、夢だった段位認定試験に合格した。まだまだ下手だけどこれからも一生懸命練習していきたい。今でもそろばんをはじく時、あの不思議な、〇君と一緒にいるような感

いのちの作文大賞（中学生）

覚になることがある。人は亡くなっても、生きている僕らに力を与えてくれる事があるのだと僕は思う。〇君の分も僕は生きていく。この命を大切に、見ていてくれる〇君に、胸を張れるように、僕は今日もそろばんをはじく。

講評

一緒に行こうと頑張った選抜合宿、その直前に親友が突然亡くなった。歯を食いしばり頑張る中、突然指が軽く動く。それは亡くなった親友が力を貸してくれた二人ではじいたそろばんだった。親友〇君との生前からの熱い友情が全体を貫いており、悲しさの中にあってもしっかり前への歩みを刻んでいる点が素晴らしい。冒頭の唐突な会話から読み手を引き付け、場面を巧みに変化させながら現在に至るまでをテンポよく、力強く展開できている。

優秀賞・選考委員長賞

「あさがおのいのち」

姫路市立荒川小学校　一年四組　泉　千晶

がっこうであさがおをうえました。はちのはんぶんにつちをいれて、おとうさんゆびであなをあけて、そこにちいちゃくてくろくてすいかみたいなたねをうえました。

まいにちみずやりをしたのでめがでて、はっぱがちいさいのから、どんどんおおきくなりました。かぞえきれないくらいはっぱがふえました。そろそろおはながさくかな、とおもいました。

ろくがつのおわりにさいしょのはながさきました。ぴんくいろのてのひらひろげたくらいのおはなで、とてもうれしかったです。なんにちかあとにももう2つくらいさきました。もっとみずやりをがんばって、もっとさいてほしいとおもいました。そしたらまた4つぐらいさきました。4ついっきにさいたから、みずやりのおかげだなとおもいました。

なつやすみのまえに、おかあさんがはちをいえにもってかえってきて、それからもたくさんみずをあげました。つるがぐんぐんのびて、はっぱがどんどんふえました。むらさき、あおむらさき、あかむらさきみたいないろのおはながさきました。つぼみがでたら、つぎのひたくさんのおはながさくな。たくさんおはなになったからすごい！とおもいました。

あるひおはながさいたあとにちゃいろのまるいみがでてきました。おかあさんが「このなかにたねがあるよ。」といいました。ほんとうに、なかに、くろいさいしょのたねみたいなものがありました。いっこのたねをうえたのに、よっつのたねがとれました。これからもたくさんたねのみができたら、かぞえきれないたねがふえるのかな。それでまたあさがおのたねをうえて、たくさんたくさんどんどんつづくのかな。そういうのがいのちなのかもしれないとおもいました。

講評

毎日の水やりを欠かさずに行い、鉢植えのあさがおがそれに応えるように日々成長していく様子が、細かな観察力を持ってつづられている。そして、成長し美しい様々な色の花が咲きほこり、再び出発点に戻るといういのちの循環と、一粒の種からたくさんの朝顔に広がっていくいのちのつながりへの想いが、テンポの良い場面展開とともに、力みのない素朴な表現で描かれている。いのちの本質をしっかりとらえている作品である。

優秀賞・選考委員長賞

「みんなちがって当たり前」

加古川市立野口小学校　六年一組　藤原　玲音

みんなが笑顔で生きていける世の中になればいいなあと、ぼくは思います。ぼくは見た目が少し変わっています。どう変わっているかというと、ぼくはかみの毛を伸ばしていて、毎日くくって学校に行っています。

なぜこんなにかみを伸ばしているかというと「ヘアドネーション」をするためです。ヘアドネーションとは、病気などでかみがぬけてしまった人達のカツラを作るために寄付をすることです。この寄付をするためには32㎝以上かみを伸ばさないといけないのです。

ヘアドネーションをしようと思ったきっかけは、ぼくのおじいちゃんが、白血病になったことです。ぼくは白血病がなにか分からなかったのでお母さんに色々聞いて教えてもらいました。その中で治療の時にかみの毛が全部ぬけることもあると聞きました。男の人でも女の人でもつるつるになってしまうと困るしいやだろうなと思いました。その時みんなの寄付でカツラを作ってあげると知ってぼくもやろうと思いました。女の人は特にかみの毛がないと、色々いわれたり見られたりしてかわいそうと思ったからです。

人は少し人とちがうと、すぐ悪口とかをいってしまうことがあります。はだの色がちがう・民族のちがい・背が小さいとか太ってるとか、生まれつき体が不自由な人を、ちがう目で見る人もいます。ぼくは自分が何かすることでそういう目にあう人が一人でも減ってくれたらいいと思います。ぼくもかみの毛を伸ばしはじめたころ「なんで男のくせにかみの毛伸ばしてんの？変やで。」といわれたり「女子みたい。」とかじろじろ見られました。

男はかみの毛が短い、長いと女の子と決めつけていわれました。

ぼくはそれはちがうと思います。みんながみんな同じである必要はないと思います。だから人の見た目を悪くいうのはよくないと思うしその一言でいじめになったりすごくその人がきずついたりすると思ってほしいです。

ぼくもいわれるのがいやで何回もかみを切ろうと思いました。けれどぼくがやめてしまうと困ったり悲しい思いをする人が増えてしまったらいやなので今もこうして続けてます。

ぼく一人ががんばっても全員をたすけることができないのでみんなが色々な人がいることがあたり前なんだと理解してみんなで助けてあげれるようになってほしいです。

みんなが安心して生きていける社会になりますように。

講評

白血病で闘病中の祖父の髪が抜け落ちたことをきっかけに、男性ではまだ珍しいヘアドネーションを実践していることをつづった内容。人と違うとすぐに否定的なことを言う世の中に疑問を感じ、社会の多様性を主張。実際にくじけそうになりながらも、それでも世間の偏見を跳ね返して病気で苦しむ人たちに役立ちたいという決意が力強く表現できている。いのちの大切さの受け止めのみで終わらずに、実際の行動として踏み出せているところに拍手を贈りたい。

優秀賞・選考委員長賞

「受けつぐ思い」

兵庫県立大学附属中学校　一年二組　前川　綾音

毎年、お盆は祖母の家でうなぎを食べる。今年、初めて私達子供もうなぎを焼くことになった。

祖母が、「美鈴の愛情レシピ」という本を見せてくれた。祖母は、そこにのっている「うなぎ焼き（家伝）」というレシピで毎年作っている。このレシピは、たれを手作りして、七輪で何回も焼き返して、身がぷりっと焼きあがる。私の大好物だ。「美鈴の愛情レシピ」は、お店に売っているものではない。その本は、祖母の姉の美鈴さんが病気療養中に自宅や病床で書いたものだ。料理の作り方や洗濯の仕方など生活の中で役立つことをいろいろ書きとめたものだ。そのノートをだんなさんが冊子にしたものだった。イラストや表が書いてあって分かりやすい。

美鈴さんは、白血病だった。それを治すために、骨髄の移植をすることになった。姉妹の中でも一番美鈴さんの骨髄に合っていたのは、祖母の骨髄だった。移植の予定だったが、祖母の骨髄は最終的にぴったり合わなかった。だから、骨髄バンクで探すと九州の男性の骨髄とぴったり合い、手術をした。しかし、その三年後に五十六歳という若さで美鈴さんは亡くなってしまった。祖母がアルバムを見せてくれた。そこには、メリーゴーランドに乗って、笑っている美鈴さんと娘のまりちゃんがいた。初めて見る美鈴さんは、私の母にそっくりだった。

美鈴さんが神戸の病院に入院中、だんなさんは大阪の仕事の帰りに毎日、いくらおそくなっても病院に立ちよって、とりとめもない話をしたり、車イスに乗せて散歩していたりしていたらしい。ひいばあちゃんは、娘の病気が治ることを祈りながら、バスで片道二時間かけて、美鈴さんの食べたいものを持って通った。きっと、美鈴さんが亡くなって一番ショックを受けたのは、ひいばあちゃんだろう。

「美鈴の愛情レシピ」は、めいやおい、娘やむすこなど親せきや知りあいの人にわたされ、受けつがれてきた。私が食べたうなぎの味も受けつがれた味だ。とてもおいしくて、毎日食べたいと思うくらいだ。きっとだんなさんは、この本をみんなにわたしてレシピを受けついでほしいと思ったのではないか。また、美鈴さんは自分の子供のもしものことを思って書いたのではないだろうか。この本は、お母さんも参考にして料理を作っている。私は、祖母の料理が大好きだ。いつか、祖母みたいな料理を作ってみたいと思う。私は、そんな思いを受けついでいきたい。

講　評

白血病で亡くなった祖母の姉の美鈴さんが、病気療養中に書き留めた「美鈴の愛情レシピ」。姪や甥、母子で展開される味のレシピの伝承とともに、その思いも受けつぐ。比較的短い文章で展開される愛情レシピの説明は、歯切れがよく、文章の豊かさも相まって読み手にレシピに対する様々な想像力をかき立て、手にとって見て、そして味わってみたい、そんな想いを強く抱かせる内容となっている。

優秀賞・選考委員長賞

「動物実験について」

神戸市立湊翔楠中学校　二年一組　佐々木　花音

見慣れた洗顔料の説明書の次のような文章に目が止まった。「動物実験は行っていません。」今まで、人間が食べるために動物が犠牲になっていることは強く意識していた。しかし、洗顔料のような食べ物以外の製品でも、動物が犠牲になっているんじゃないかと気になり調べてみることにした。

ＪＡＶＡという、動物実験の廃止を求める会ＮＰＯ法人の主張を読んだ。正直に言うと気分が悪くなるような想像を遥かに超える残酷な内容であった。一番軽いと思った実験でさえ、育毛剤の開発に、若いマウスやウサギが背中の毛を剃られて、その皮膚に薬剤を連日塗布されたり、男性の脱毛のモデルとしてベニガオザルが前頭部に薬剤を連日塗布され、その皮膚組織を切り取られるというものであった。これだけを読めば動物実験は絶対になくすべきだと思った。

一方で、一般社団法人日本生理学会による動物実験を肯定する報告も読んだ。こちらは、化粧品に関する動物実験と医療に関する動物実験という違いがあったものの、やむを得ない策として、人間と同じ生命原理が働いて生きる動物に犠牲を求める、としている。さらに、食物として動物を用いるのと同じ道理であり、動物を犠牲にして生きる人間の生の一面、と述べている。私はそれを読み自分は動物実験に対して絶対に反対だと言い切れなくなってしまった。

思い出してみれば、新型コロナウイルスがまん延し始めた頃、ラットはウイルスに感染しなかったが、ハムスターには感染することが判明した。私は三匹のハムスターを飼っているが、もしも研究のために私のハムスターを差し出せと言われたら何に替えてもそんなことはできない。自分のペットはとても大切なのに、日本生理学会が求めていることを、完全に否定できないということは、自分の中のエゴにつながるのかもしれないと感じた。自分は絶対に反対派になるだろうと思い調べたテーマが、すぐには結論を出せない結果となった。ただ、世の中の動きとして救いなのが、科学者が３Ｒの原則を尊重していることだ。具体的には「実験に使用される高等動物の数を減らす」「できるだけ動物を用いない他のモデルで代替する」「最も人道的と思われる状態で実験するように技術を洗練する」ということだ。しかし、残念ながら、まだ動物実験に取って代わる完全な代替法は存在しない。ただし細胞、組織、臓器培養と同様コンピュータモデルを用いることにより実験動物の使用数を減らすことは可能である。動物実験をもはや必要としない日がくるかもしれない、と書かれた論文もある。幾つかの会社では安全性試験に動物を用いていないと主張し、それにより自社製品の販売を促進している。たぶん他の会社により以前に動物を用いて試験が行われ、その安全性が確認されているような製品に関しては、確かに安全性試験は不要である、とも言われていた。そこで、また先程の洗顔料の説明書に目を戻した。この製品は中世ヨーロッパから作られていた植物性の石けんを原材料としている、と。その間にはもしかすると私達の知らないような実験が行われていたのかもしれない。けれど、昔から使われていたものを取り入れれば二度目の実験は必要ないのかもしれないと思った。古い技術と新しい技術を取り入れることは、いつか命を救うことにつながるのだと思った。

講　評

化粧品開発に伴う動物実験の賛否への葛藤の中、古くからの実験結果と最新の培養技術を活用することで不幸な動物が減ることを願う内容。動物実験反対といいながらも、食用として命をいただくことと動物実験で命を奪うことに何が違うのか、自分のペットであるか否かでその意見はさらに変わる。そんな態度が明確にできない自分にいら立ちを感じながらも、解決策を懸命に探る作者の気持ちがよく描けている。大人も考えさせられる作品である。

優秀賞・選考委員長賞

「天秤の扱い方」

兵庫県立大学附属中学校　三年二組　竹中　友唯

「母さんって猫は好きやっけ?」
遊びから帰ってきた弟が、突然母にそう尋ねました。母は不思議そうな顔をしながらも、
「好きやけど、急にどうしたん?」
と弟に尋ね返します。
「今俺、友達と猫の面倒みてんねん。」
聞き流してしまうくらいの軽さで、かなり重大な言葉が弟から放たれました。
弟の話をまとめると、「友達と遊んでいた時に倒れている野良猫を発見した。この暑い中で放置する訳にもいかないから、みんなで餌を買ったり水をやったりしている。」ということでした。家で飼うことはできないだろうか、と考えた弟は、
「母さんって、猫は好きやっけ?」と尋ねたのです。弟の話を聞いて、母は
「うちでは飼えないよ。犬もいるし、私は猫アレルギーだし。大体、あんたも猫アレルギーでしょう。」
実は、弟も猫アレルギーなのです。でも、当の本人はどこ吹く風。「毛をちゃんと払えば大丈夫」と思い、猫の世話をしたようです。
「飼うのは無理かあ。でもな、猫が最近懐いてくれてな。俺のこと見たら寄ってくるようになってん。明日も行く!。」
そう嬉しそうに話す弟を見て、私は思わず
「行くの止めとき。飼うこともできないのに餌と水だけ与えるのは無責任やろ。本当に猫が死にそうになっても、小学五年生だけではどうもできないし。しんどい思いするだけやで。」
と、強めの口調で言いました。それを聞いた弟は、少しすねながらも
「でも、行くもん。懐いてくれたし。ここで止めることの方が無責任や。助けたい。」
と、私の目を真っ直ぐに見つめて言いました。弟の言葉が、頭から離れませんでした。
それから数日たったある日、
「姉ちゃん、今日はな、おじいちゃんが話しかけてきたんや。『ちゃんと猫の面倒みてあげてな、君らが頑張るんやで』って言われた。」
猫のお世話から帰ってきた弟が、ニコニコしながらこう言いました。でも、私はおじいさんの言葉がひっかかりました。
「『頑張るんやで』って、おじいさんはそれだけ言ってどこか行ったん?。」
自分は何もせずに「頑張るんやで」とだけ言って去ってしまうなんて、
「なんて無責任なんだろう―。」口にする前に、私は衝撃を受けました。私が前に弟に言ったことが、頭によぎったからです。あの時、私は弟の話を聞いて、深く考えもせずに「いのち」を見捨てるよう、そして「いのち」から逃げるよう言ったのです。言っている内容は違うけれど、やっていることの本質はおじいさんと同じだと思いました。私は自分を恥ずかしく思いました。それに対して、弟たちは誰かに任せるのではなく、自分たちで一生懸命に全力で考えて猫を助けようとしたのです。
多くの人は、野生動物が倒れていたら「責任」や「リスク」などを動物の「いのち」と天秤にかけると思います。自分一人にできることは限度があるので、それはとても大切なことです。ですが、私のように天秤にかけることすらしなかったり、「責任」などといった「おもり」を勢いよく天秤にのせることでそちらに考えが無意識のうちに傾いてしまう人々もたくさんいるのではないでしょうか。
弟たちのように「助けたい」という気持ちだけを原動力にして行動するのは難しいかもしれません。ですが、私たち一人一人が冷静に、そして丁寧にこの天秤を扱うことで

優秀賞・選考委員長賞

「いのち」との向き合い方も変化していくと思います。それは、この社会と動物たちのいのちの関係をより良いものに変える第一歩になるはずです。

とても扱いが難しいこの天秤。いつか私なりの「完璧な扱い」を身につけてみせます。

講評

弟になついた野良猫のいのちについて、放置するよう言ったものの果たして責任ある助言なのかどうか、見ず知らずの人が弟に対して言った無責任な発言にいきどおる一方、自らの助言と責任という点では違いがないことに気づく。責任と動物のいのち、静かにのせれば釣り合うものが片方の重りを勢いよくのせたために、片方に傾くという天秤の特性を上手く捉え、ついおちいりがちな状況が巧みに表現されている。葛藤の場面が臨場感を持って浮かび上がる作品である。

優秀賞

「かぞくのはなし」

堺市立鳳南小学校　一年二組　上杉　碧

かれんはいぬです。かぞくとしていきていました。ところがあるあさとつぜんなくなりました。とてもしょっくでした。わたしは、ずっとてんじょうをみあげていました。かれんがそらにいったのをかんじていました。しぬということはなんかいかみさまにおねがいしても、めをさまさないことだとわかりました。

でも、わたしはまいにちかれんのしゃしんのまえにごはんをあげつづけています。ときどき、かれんのだいすきなくだものをあげることもあります。かぞくのみんなとかれんのはなしをしてかなしくなることもおおいのでつらいです。

だけど、かれんのことをかんがえるときわたしのなかにかれんがでてきます。みえなくなってもわたしのなかにかれんがいるので、わたしはいきていけるきがします。

「つなぐいのち」

大阪市立真田山小学校　一年四組　河村　寛太

はる、ぼくは、こうえんで2ひきのもんしろちょうのようちゅうをみつけた。ちょうになるところをみたいから、いえでそだてることにした。はっぱをたべて、だんだんおおきくなって、うごかなくなった。もうすぐさなぎになるのかなあとおもって、ぼくは、わくわくした。でも、あさおきたら、もんしろちょうのようちゅうからちがうようちゅうがたくさんでてきていた。ぼくは、なにがおこっているのかわからなくて、びっくりした。しらべてみたら、でてきたのははちのようちゅうだった。もう1ぴきのようちゅうも、きせいされていた。だいじにそだてていたから、ぼくはくやしかった。おかあさんは、

「はちのおかあさんも、あかちゃんにおおきくなってほしかったんだろうね。」

といった。ぼくは、もんしろちょうもはちも、いっしょうけんめいいのちをつないでいることをしった。もんしろちょうのようちゅうがしんでしまったのはすごくかなしかったけど、ぼくは、はちにもすこしやさしいきもちになれた。ちいさいいのちもたいせつにしたいとおもった。

「カエルのいのち」

西宮市立東山台小学校　一年一組　鴫原　杏奈

7がつ22にち、おじいちゃんとおばあちゃんとママとおとうととかわにあそびにいきました。かわにいろいろないきものがいて、わたしはアメンボを9ひきとおさかなを10ぴき、かにを2ひきむしとりあみですくってばけつにいれました。

おさかなをいっしょうけんめいとっていると、だれかがこえをかけてくれました。かおをあげてみてみると、おんなのこがカエルをてのひらにのせてわたしてくれました。そのカエルはひとさしゆびにのせてもおちないぐらいちいさくて、きれいなみどりいろでした。さわるとプヨプヨでスライムみたいでした。わたしはカエルをてのひらにのせて、かわでいっしょにおさんぽをしました。

カエルのことが、だいすきになったので、バケツにいれたままおうちにもってかえってむしかごでそだてたいとおもいました。でもカエルにとっては、このかわがすみやすいのでかわにかえしてあげました。

カエルとはなれて、しばらくたつととてもさみしくなってきました。くるまで、おばあちゃんのおうちにかえるとき、さみしくて、さみしくて、ないてしまいました。ママは、「きっと、パパもカエルのいのちをたいせつにおもって、かわにかえしてあげたことをほめてくれるとおもうよ。」といいました。かえって、パパがいいました。

「えらかったね。これでカエルもおうちにかえって、かぞくにあえるね。」

もし、カエルをおうちにもってかえっていたら、つぎのひにひっくりかえってしんでしまったかもしれないので、かわにかえしてあげて、よかったです。

そのあと、あるひのよる、ゆめでちょっぴりおおきくなったカエルにあえました。とってもうれしかったです。またいつか、おおきくなったほんもののカエルにあいたいです。

優秀賞

「いのちのおもさ」

私立近畿大学附属小学校　二年梅組　田邉　愛李

この夏、わたしは「かわいそうなぞう」という本を読みました。せんそうのためにころされたどうぶつ園のぞうの話です。わたしはこの本を読んで、ぞうがとてもかわいそうだと思いました。それは、ぞうがごはんをもらえずよわっていき、さいごにしんでしまうからです。ごはんがほしくていっしょうけんめいげいをするぞうもかなしかったと思いますが、それを見ていたぞうがかりの人はもっとかなしかったと思います。

わたしはお母さんに「ぞうのいのちと人のいのちのどっちがおもいと思う？」と聞かれました。わたしはどちらも同じくらい大切だと思ったので、どっちがおもいのかこたえることができませんでした。わたしは、だれかのいのちとだれかのいのちのおもさをくらべて、だれかのためにだれかのいのちをうばったりするせんそうはいやだと思いました。

テレビで、今、コロナにかかっても入いんできない人がたくさんいると言っていました。お母さんに「これからもコロナになる人がふえ続けると、『いのちのせんべつ』が行われるかもしれない」という話を聞きました。「かわいそうなぞう」と同じで、えらばれなかった人やその家ぞく、えらばなければいけなかったおいしゃさん、みんながかなしい思いをすると、わたしは思いました。今は何の力もありませんが、大きくなったら、そんないのちのおもさをくらべたりしなくてもいいせかいになるよう、たくさんべんきょうしたいと思います。

「ちいさないのち」

彦根市立河瀬小学校　三年　花田　葵乃妃

雪が深しんとつもった時、ママのおなかにちいさないのちが、やってきた。赤ちゃんの大きさは、あずきくらい。はじめて、エコーを見た時、わたしは、びっくりした。なぜかというと、心ぞうがピクピクと動いていたから。

だんだん大きくなってきて、手と足がでてきた。４Ｄエコーを見に行った時、赤ちゃんのひじが、くの字にまがっていたので、ビックリした。さらに、赤ちゃんのひじに、へそのおが、まきついていた。わたしは、くるしいかなーと思った。大きさは、わたしの手とおなじくらい。

弟のかいとのたん生日がすぎたころ、わたしは、３回目のエコーを見に行った。おいしゃさんが、

「この子は、足が長いねー。」

と言った。わたしは、赤ちゃんの足が長くて、ほねが白くてびっくりした。ちいさないのちは、女の子だとわかった。わたしは、ずっとかみさまにおねがいしてきた。妹がほしいと。

妹とわかってから、花がらの服やミトンやスタイやくつ下を買った。それから、わたしのおこづかいで、木でできたオルゴールを買ってあげた。赤ちゃんがよろこぶかな。

もうすぐ赤ちゃんが生まれるから、名前を決めた。『女の子のすばらしい名前』という本を買ってきて、わたしがすきな名前に、ふせんをつけた。何まいも、ペタペタとはった。決めた名前は、れいな。れいなのなは、なつきのなです。うれしかった。

九月二十一日は、赤ちゃんの生まれる日。その日は、しんだおじいちゃんのたん生日。なんだか、なみだがでてきた。なぜかというと、生まれかわりだから。

いよいよ、しゅっさんです。わたしは、へそのおを切るやくです。楽しみです。

「大切な二つのいのち」

神戸市立福池小学校　三年三組　泉谷　希美

わたしの家のベランダには、ゆずの木があります。そのゆずの木に毎年、アゲハチョウがたまごを生みにきます。チョウのよう虫はいっぱいゆずの葉を食べてしまうので、お母さんはよう虫がくるのをいやがります。だから、チョウのたまごをとりのぞこうとします。お兄ちゃんは虫がすきなので、アゲハチョウをそだてようと言います。お母さんは、ゆずが大切。だけど、お兄ちゃんは、たまごが大切です。

わたしは、ゆずのいのちも、アゲハチョウのいのちも大

優秀賞

切だと思います。ゆずは、おふろに入れたり、りょう理にも使います。アゲハチョウは、せっかくたまごを生んだので、すてるのはなんだかいやな気持ちになります。

どちらも、大切ないのちなので、むずかしいもんだいです。毎年、わたしの家では、ゆずのいのちと、アゲハチョウのいのちのあらそいがはじまります。今年は、おにいちゃんの言うことをきいて、アゲハチョウをそだてることにしました。すると、くいしんぼうの、よう虫は、葉を一まいのこらず食べてしまいました。来年は、たまごをとりのぞくとお母さんが言っていました。

わたしは、どちらのいのちも大切ないのちで決められない時は、どちらも生きられるようにするといい気がします。今回だったら、ゆずの葉を一まいとって、たまごをどこかにおけば、いいと思いました。こうして、何かをくふうすれば、どちらのいのちも助けられると思います。

「なくした物を数えない」

私立智辯学園和歌山小学校　三年一組　中谷　柚紀子

わたしのお父さんとお母さんは病院で働くお医者さんです。毎日いろいろな困っているかん者さんを治しています。私が「お医者さんは、病気やけがをなおせてすごいね。」とお父さんに言うと、お父さんは、「お医者さんの仕事はそれだけじゃ無いんだよ。お医者さんにも治せない病気やけがもあるんだよ。」と言いました。私はお医者さんは薬を出したり、注しゃをしたり、手じゅつをして病気を治すのが仕事だと思っていたのでびっくりしました。

お父さんは、治らない病気の人のそばにいてなやみを聞いてあげること、病気やけがで残ったしょうがいとどうやって生活していくか、どうやってがんばれるかをいっしょに考えるのもお医者さんの仕事だと教えてくれました。

お父さんの好きな言葉に「なくした物を数えるな。」という言葉があるそうです。これは今年日本でしているパラリンピックを世界に広めたイギリスのグットマンというお医者さんの言葉です。なくなった物やしょうがいを悲しむより、今残された物を最大に使うことで人生を切り開いてがんばっていこうという意味です。それを聞いた時、私はテレビでパラリンピックの車いすバスケットボールを見たことを思い出しました。車いすバスケットボールのせんしゅは、すごく速く車いすで走ってて、ボールをビュンビュン投げて生き生きして、楽しんでいました。それを見てしょうがいのある人に思えませんでした。しょうがいがあったり、困ったこと、辛いことがあっても、その事ばかりを考えず、どうしたら問題を乗りこえられるか考える大人になりたいと思いました。そして、色んな事で困っている人がいたら、その人のそばでなやみを聞いて、どうやったらがんばれるかをいっしょに考えられる人になりたいと思いました。

「すてきな命」

和歌山市立今福小学校　四年一組　矢田　陽香

あらゆる人々が平等に持っているもの、それは命だと思います。

生き物のように命には大きい小さい、重いや軽いといったちがいはありません。

ただ残念ながら、それぞれの長さだけはちがいます。0才からのスタートは同じでも、そのちがう分優しさ、かがやき、悲しみ、といったちがいがあることでしょう。

私自身、小さいころに難病の一つといわれる病気にかかってしまいました。自分の姿、そしていたみにとてもつらい気持ちになり、よく泣いていました。付きっきりの母も、心までつかれていたと思います。

毎日のつらい血液検査や、体につながれた点てき、病院の中での生活は知らない世界ばかりでした。

退院できた日、久しぶりの家の中は、パッと明るく、深呼吸できた感じでした。

また心ぞうが元気にドクン、ドクンと鳴って、いっしょに病気を治そうね、強くなろうねと言ってくれているようでした。

母が一生けん命、お腹の中で育ててくれた命は、生まれた日から私はバトンタッチされ、時には病院の先生、かんごしさんから助けてもらい、まだ十年という月日しか経っていないけれど、大事に大事に毎日を過ごして生きていま

優秀賞

す。

家族の温かさは一番うれしく、あれからずっと続いた毎年の検査もがんばれました。

先生からの「はるかちゃん、大きくなったね。」という言葉もちょっとはずかしいけれど、「えらいね。」と言われるほめ言葉のようにうれしかったです。

今なら分かります。はげまし、優しさも当然うれしいけれど悲しみ、さびしさ、つらさも一人ではなく母や父、弟そして祖母祖父達もいっしょになって、想ってくれるからこそ、温もりのある命をつなげていけるのだと。

「カマちゃんが教えてくれたこと」

貝塚市立二色小学校　五年一組　岩倉　正人

二年前の夏休み、家の前の草が刈られ、五センチくらいのメスのカマキリがぼくの洗濯物のシャツにくっついていた。きっと、すみかがなくなって逃げてきたのだと思う。ぼくは飼いたくなって、虫かごにカマキリを入れ、『カマちゃん』と名付けた。

ネットでカマキリの飼い方を調べたら、棒と水とバッタを入れることが分かった。棒は割り箸を使い、ペットボトルのキャップに水を入れた。ただ、バッタがなかなか見つからない。バッタの代わりにペットフードのサラミでも良いとネットに書いてあったので、母とスーパーマーケットに買いに行った。サラミを糸で通して、上からぶら下げてみたけれど、カマちゃんは割り箸につかまったまま動かなかった。

次の日になっても、カマちゃんはじっとしていてサラミも食べていないようだったので、心配になって、学校の先生に相談に行った。先生は、「自然遊学館にカマキリに詳しい先生がいらっしゃるよ」と教えてくれた。ぼくは大急ぎで自然遊学館に行ったのに、自然遊学館は定休日だった。サラミだけでは心配で、公園の草むらでバッタを探したけれど、ぼくはバッタ一匹も捕まえられなかった。

その夜、寝る前にカマちゃんを見たら、カマちゃんが大きくなっていておどろいた。ネットで調べると、カマちゃんが脱皮したことが分かり、ぼくは少し安心した。

次の朝、公園にバッタを探しに行ったけれど、やはり捕まえられなかった。しかし、母にたのんだら、母は十分もしないうちにバッタを三匹も捕まえてくれた。虫かごに入れると、カマちゃんはバッタを食べた。そして、自然遊学館の先生に会いに行った。

先生は、虫かごを縦長に使った方が良いとか、バッタは一匹ずつの方が良いとか、ネットでは分からなかったことを教えてくれた。ぼくは、カマちゃんのためにできることが見つかって、なんだかとてもうれしかった。

バッタを捕まえるのがぼくの日課になった。雨の日は、もやもやした。カマちゃんがいて幸せなのに、命を育てることの大変さを痛感した。三週間が経ち、ぼくの身勝手でカマちゃんを飼っていて良いのか、カマちゃんにおむこさんが必要なんじゃないかと不安になって、自然遊学館の先生に相談に行った。先生は、「遊学館近くのアベリアの花畑にカマキリが潜んでいるから」と、カマちゃんを放してくれた。カマちゃんは、さっと茂みに身をかくした。ぼくはカマちゃんの幸せを願って、家に帰った。ぼくは悲しいはずなのに、なぜかほっとしていた。

アベリアの花畑に来ると、ついカマキリを探してしまう。去年は見つけられなかったけれど、今年は見つけた。カマちゃんの孫だと思うと嬉しくなった。カマちゃんは、ぼくに命の尊さを教えてくれた。ぼくもカマちゃんのように、精一杯生きたい。

「うまれるいのちの大切さ」

姫路市立広畑第二小学校　五年一組　加藤　野々香

私は学校で命のたん生について学びました。あかちゃんはお母さんのおなかの中で十ヶ月間、羊水に包まれ、へその緒から栄養をもらい、すくすくと大きくなってうまれます。羊水という初めて聞く言葉に興味をもって調べてみると「羊水検査」という言葉が出てきました。「羊水検査」とは、はりをさしてあかちゃんに異常がないか調べる検査だそうです。

「え、なんでそんなことするんだろう」

とびっくりしました。でも色々調べていくと、四十才を過

優秀賞

ぎてあかちゃんをうむとしょうがいをもったあかちゃんがうまれる確りつが高くなるそうで、うむ前に調べることによってあかちゃんが病気かどうかが分かり、家族と話したりして、心の準備をしたり、受け入れるようにかんきょうを整えるために行われると書かれていました。しかし、場合によってはうまないという選たくをする人がいるということを知りました。

しょうがいや病気をもってうまれてきたらダメなのでしょうか？私はそうは思いません。それは、パラリンピックで活やくしている人たちや、私のあこがれている目が見えないピアニスト辻井伸行さんなど、しょうがいを持っていてもいきいきとして人生を送っている人たちを知っているからです。でも、羊水検査をしてうまないと決めた人は「しょうがいを持っている子どもを育てるのは大変だから育てられる自信がない」とか、「もしうんでも、その子どもが病気がつらくて、「何でうんだの？」と言われるかもしれないし、しょうがいを持っていたら幸せかどうかわからない」という思いで、うまないことに決めたと書いてあるのを見て、うむかうまないかの選たくをすることは本当に苦しいと感じました。なぜなら、羊水検査をしなければうまれる前にいのちを終わりにすることはなかったかもしれないのに、しょうがいがわかることで、どちらかの選たくをしないといけないからです。でも、あかちゃんの気持ちなんてうまれる前に勝手に決めつけてはいけないのでは？と思うし、いのちを親の思いで終わりにしてもいいのか、ぎ問に思います。私はいらない「いのち」なんてないと思うし、たとえしょうがいや病気があったとしても「いのち」は大事にしないといけないと思うからです。

そのことについて家族で話し合ってみました。

「まだまだしょうがいのある人が生きにくい社会だから、うむことをためらってしまうのかもしれない」

とお母さんが言っているのを聞き、あらためて考えました。しょうがいの有無で「いのち」の重みが変わるのではなく、しょうがいが、こ性としてみとめられ、だれもが安心して生きていける社会を私たちがつくっていければ「いのち」を大切にしていくことにつながるのではないでしょうか。

「あたりまえの生活」

兵庫教育大学附属小学校　六年二組　里崎　渉真

僕の今一番の願いは、大好きなお兄ちゃんに会うことです。声だけでもいいから聞きたいです。

兄は、去年の十月二十三日に亡くなりました。ユーイング肉腫というガンです。

中学二年で部活のサッカーも頑張っている時でした。腕が段々はれてきて、病院に行って調べたらガンでした。兄は不安だったはずなのに泣くのを我慢しているみたいでした。夜中に兄が寝ながらうなってて、お母さんが一緒に泣いてあげてました。そこからお兄ちゃんは弱音を吐かずに前向きに頑張りました。僕が四年生の時です。お母さんは病院に泊まってたので、さびしかったけど「お兄ちゃんを優先して」って言っていました。

兄は抗がん剤がきつくてしんどかったみたいです。僕は兄が帰ってこれるようになるまで待つしかありませんでした。薬が効いたのか、ガンはすぐに消えました。お母さんが病院から帰ってきて一緒によろこんだのを覚えています。病院の部屋から出る時にマスクをつけないといけないから兄はずっとマスクだったけど今、コロナでマスクをしなければならないけど、その時の兄の夏のマスク姿は珍しかったと思います。抗がん剤をしてるから、あたりまえに食べてた卵かけご飯も、納豆も、刺身も食べたらあかんことになりました。あたりまえにしていたことが出来ないけど兄は本当に強かったです。「なってしまったものは仕方ない、頑張るしかない」って、いつまでも前向きでした。たまに病院から帰ってきたら、兄の大好きな焼き鳥を食べに行ってました。

十ヶ月の入院中、がんは消えたようなのでやっと退院できました。兄を待ってくれてた友達も先生も本当によろこんでくれました。

でもすぐに、兄が体のあちこちが痛がり、まさかの再発でまた入院になりました。今度はもっと大変でした。お兄ちゃんが死んでしまう。夢だったらいいのにって何回も思いました。兄も気づいたのか家族に手紙を書いてくれました。「渉真がお兄ちゃんの弟でよかった」って書いてくれました。

優秀賞

抗がん剤も出来なくなり悪くなっていく兄でしたが、生きたいって気持ちは強く「大丈夫やから」って前向きに生きようとしていました。

兄が亡くなってからはたくさんの人が来てくれました。泣いたら兄に情けないって思われたくなかったから我慢していたけど、兄に花束を置く時に泣いてしまいました。

姿は見えないけど、兄は見てくれていると思います。

ずっとえがおだったお兄ちゃん。やさしかったお兄ちゃん。

ずっとずっとお兄ちゃんは、僕のあこがれです。

「殺処分ゼロにむけて」

加古川市立平岡小学校　六年二組　肥野　詩菜

私は、六年生の一学期の道徳の授業で、「七十八円の命」の勉強をしました。七十八円という金額は、犬や猫の殺処分にかかる費用のことです。初めてこの現実を知って、胸が張りさけそうになりました。

行き場所がない犬や猫たちは、保健所に連れて行かれるという事は知っていたけれども、新しい家族が見つかるまで、保健所で保護してもらえるものだと思っていました。

飼い主から見捨てられた動物は日付ごとにおりに入れられ、そこで三日間、飼い主を待ち続ける。そして飼い主が見つからなかった時には死が待っている。こんな残こくな事が行われていることを知って悲しい気持ちになりました。こんな残こくなことは、知らない方がよかったかもしれません。

私が生まれた時から、我が家では猫を飼っていました。捨て猫だったそうです。私が三年生の時に、十三才で亡くなりました。いつもと変わりなく元気だったけれど、急にご飯を食べなくなり、水も飲めなくなり、徐々に体が弱くなっていき、そのまま亡くなりました。家族みんなで大泣きしました。私は、何もすることができなくて、とても辛かったです。

でも、もし保護していなければ、保健所に連れて行かれて、殺処分されていたかもしれません。そう思うと、保護して家族で過ごせて、幸せだったかなと思います。

そして、今年の春に保護猫を引き取れないかという話が我が家にきました。

生き物を飼うということは、簡単なことではない。ただかわいいというだけでは育てられない。いつかは死がおとずれるということ。家族でたくさん話し合いをしました。ちゃんと最期まで責任を持って育てる約束をし、子猫二匹を飼うことに決めました。

野良猫や捨て犬、ペットショップで買い手が見つからず、大きくなってしまった動物たちが、年間二十万匹以上、殺処分という形で命を失っています。

殺処分を減らすためにはどうすればよいでしょうか。

世話が大変になったとしても、捨てたりしない。迷子にさせない。犬や猫は、一回の出産でたくさん生まれます。すべての子供を育てるのも、里親を探すのも大変なことです。ペットを飼う時は、必ず、避妊・去勢手術をして、繁殖をさせないこと。近隣住民とのトラブルで自治体に引き取られることのないようにしつけはしっかりすること。また、保護団体の多くは、人手も足りませんが資金も足りていないようです。寄付という形で協力することもできます。

殺処分ゼロに向けて目標を達成するために、私たちも、できることをする必要があります。

私は改めて飼い主になるということの責任を再確認しました。最期まで世話をするということも、私たちにできる殺処分ゼロに向けた取り組みの一つだと思いました。

「おじいちゃんが教えてくれた命」

大津市立打出中学校　一年七組　齊藤　夢

令和三年七月六日。この日は命について深く考えた日だった。

部活がなく、授業も早く終わったその日、家の前の坂道を鼻歌まじりで上っていった。もうすぐ家につくかつかないかの狭間で母が何やら重い荷物を運んでいるのが見えた。珍しく父も帰っている。仕事が早く終わったのかな、と頭で色々考えながらゆっくり歩く。

玄関の前まで来ると、母が私に気づいたのか、こっちへ振り向いた。

優秀賞

「こんなに早く帰って、どしたん?」
とおそるおそる聞く。母は落ちついた口調で言った。
「おじいちゃんが亡くならはった。夜になったらおじいちゃんちへ来てくれるかな。」
いきなり告げられた言葉にとっさに声が出ず、心臓がドキドキと高鳴るのが感じられた。いつもと変わらないはずなのに、軒下の風鈴が、やけにうるさく聴こえた。
私がおじいちゃんに会えたのは、夏の長い日もとっぷりと暮れた頃だった。
父がせわしなくあちこちに電話をかけたり、何やら荷物を運びいれたりしている。私がやるべきことなど何もなく、ただただぼんやりとおじいちゃんのそばに座り込んで、寝顔を見つめていた。母が固く目を閉じたおじいちゃんの頭を、何度も何度も慈しむようになでながら声をかけている。
「お父さんようがんばったなあ。お疲れさま。」
その姿は母がお母さんでおじいちゃんが子供のように見える。亡くなる三日前に、グループホームへ面会に行った時もそうだった。母が眠るおじいちゃんの顔や頭を、子供をあやすように優しく何度もなでていた。
人は年を重ねると、子が親となり親が子に還るのだろうか。そうして、もらった命は順々に回っていくのだろうか。私は命のめぐりというものをなぜかその時強く感じた。
今、そっと触れるおじいちゃんの顔はずっしりと冷たい。三日前、寝ていながらも、手をそっと握ると強く握り返してくれた。そのぬくもりをはっきりと覚えている。それはもはや決して帰ってこないぬくもりだ。
その瞬間、胸の奥からなにやら熱いものがこみあげてきて、おじいちゃんの顔がはっきり見えない。そして、いろんな思い出が頭の中をよぎった。おじいちゃんと一緒にご飯を食べたこと、おじいちゃんと一緒に山に登ったこと、思い出すことはたくさんたくさんあるのに、不思議とどれもぼんやりしている。
認知症を患っていたおじいちゃんとは、ここ数年ホームでしか会えていない。ずっと一緒にいた大事な家族でも、人は別々にしか生きられないのだ。あたりまえのことなのだが、それはとても無常なことに思われた。
命は、長い年月を経てなくなるものもあれば、ある日突然なくなってしまうものもある。一瞬先のことなのか、何十年も先のことなのか、それは誰にも分からない。だからこそ今この一瞬を、今日この一日を、大切にそして精いっぱい生きていきたいと思う。
つい最近、母に言われて印象に残った言葉がある。
「あなたが生まれたとき、周りの人が笑ってあなたが泣いたでしょう。あなたが死ぬときは、あなたが笑って周りの人が泣くような人生を送りなさい。」
これはキリスト教の教えだそうだ。意味はそのままだが、これを聞いた時、この言葉には強い思いと深い愛が込められていると思った。私という命は祝福されて生まれた。もちろんおじいちゃんも大喜びしてくれたはずだ。だから私は周りに愛と喜びを与えて生きるべきなのだ、と。
たとえこの先、辛く苦しいことがあったとしても、その時はこの言葉を思い出し、前を向いて生きていこうと思う。

「命の循環」

大津市立志賀中学校　一年一組　安田　龍司

ぼくの祖父は家の近くで畑をしています。学校や部活がない時、僕は畑の手伝いをしています。
畑では「天地返し」という、畑を深く耕すことで土を表層の土を入れ替える作業をしました。スコップを持っている腕がもぎ取れるんじゃないかと思うくらい痛かったです。腐葉土を一輪車で運ぶ時は、バランスを取れるまで難しくてフラフラしました。じゃがいもの収穫では、土の中からミミズがニョロニョロ出てきて気持ち悪く、なすに水をやっていたらカエルが横から飛びだしてきてびっくりし、僕は虫があまり得意ではないのでイヤだなぁと思ってます。長袖、長ズボンで行っているのに、服で覆われていない顔や首、手などを蚊にも刺されるし、暑いです。祖父に
「龍司、ちょっと畑手伝ってくれ」
と言われると、僕は本当にイヤでイヤで仕方ありませんでした。
そんなある日、祖父が畑に枯れた観葉植物を植えていました。僕は
「なんで、そんなん植えてんの?」

優秀賞

と聴くと祖父は、
「家に置いてて枯れてしまったけど地植えしたら葉が生えるかもしれん。」
と言い植木鉢から植え替えをしていました。
「一回死んでしまったのにそんなん生えるわけないやん。」
僕は心の中でそう思いました。
しばらくして、また祖父の手伝いで畑に行ったときです、あの枯れていた観葉植物が新しい葉を何枚も付けていました。僕は驚いて、
「うわっ、スゲー」
と声に出して言いました。観葉植物の生命力に感動しましたが、どうして一回死んでしまった観葉植物が蘇ったのか？僕はとても不思議だったので、ちょっと調べてみることにしました。
植物は土の中に根を伸ばして、水分や養分を吸収して育ちます。だから土に秘密がありました。根は呼吸しているので、通気性がよい土でないと植物は育たないようです。ミミズやカエルも食物連鎖の流れにあり、天地返しも腐葉土も、フカフカの土を作るために必要なのだということがわかりました。
僕が食べている野菜もこうした生き物たちの働きの中で命がつながっていました。
「いただきます」は生きてる命をいただくからいただきますなのだと聞いたことがありましたが、自分の経験から、より理解が深まりました。観葉植物が蘇ったのは、さまざまな生物が豊かに生きている土に植えたおかげだと思います。
イヤイヤで仕方がなかった畑の手伝いでしたが、命の循環がわかり、しんどいけれどこれからも畑に行こうと思えた経験でした。

「震災ウォーク」

大阪市立北稜中学校　一年二組　星野　恋春

「今年は一緒に歩く？」と父が言った。父は毎年一月十七日、阪神淡路大震災が起こった日に、神戸市の東遊園地という公園から阪急西宮北口駅まで、約二十五キロメートルの道のりを歩いている。なぜその区間を歩いているのかというと、阪神淡路大震災で建物や線路、高速道路などがこわれ、自分で歩かないと何も手に入れられなかった道のりだったからだ。私は、二十六年目の今年、震災の時にどのようなことが起きて、どのくらいの距離を歩いていたのかを知るために、父と歩いた。この地震の犠牲者は、六千四百三十四人で、一瞬でたくさんの人が亡くなったり、町や建て物がめちゃくちゃになったりしていることを聞いて、とてもおそろしいことが起きたんだと思った。
歩く前に、地震が発生した午前五時四十六分に、東遊園地で黙とうをした。灯籠がたくさん並べられていて、上から見ると、「がんばろう一・一七」となっていた。その火は安全でやさしくておだやかで美しいけれど、火災によって出てきた火は、激しくておそろしく、危ない。当時の建物は、木造などが多かったそうで、地震の揺れでこわれやすかったり、燃えやすかったので、こわれた建物などの下じきになり、そのうち火が回って火事になり、亡くなってしまった人がたくさんいたそうなので、同じ火でも全くちがうものなのだなと思った。
その後、父と歩いて説明してもらいながら当時の写真がのっている本を見て、現在と見比べた。比べてみると、様子は震災直後とはちがい、きれいに整備されていたので、復興したことが分かる。復興といえば、ＪＲ六甲道駅という駅がある。その駅は、とても早く復興している。線路は無事こわれずに残っていたが、高架は落ちてしまっていたそうだ。どのようにすれば早く復興できるかを考えたところ、落ちてしまった高架を持ち上げて直すという、今までにない方法で修復することになった。またいつ余震が起きて、高架の下じきになってもおかしくない時に、高架の下にもぐって工事をしていたそうだ。その方法で工事をした結果、約三か月で復興することに成功し、電車を通すことによって、たくさんの人々を喜ばせ、勇気づけたという。もし、災害が起きて町がめちゃくちゃになってしまった時に電車を走らせてくれたら、私は勇気づけられるし、この出来事を聞いただけでも、私はとても勇気づけられた。
それから、阪神高速道路が横倒しになったという現場に

優秀賞

も立寄った。目の前にある高速道路は、とても太くて強そうな柱で支えられていた。こんなに頑丈なものが地震によって倒されたなんて信じられない。だから、自然の力はそれだけ強くておそろしいということが分かった。

私と父は、約六時間かけて道のりを歩き、無事ゴールした。ただ二十五キロメートル歩くだけでも大変なのに、建物などがこわれた道なき道を歩いた当時は、どれだけ大変だったのだろうか。

私は震災ウォークを体験して、「いのち」とは、いつ失ってもおかしくないものだと思った。そして同時にとても尊いものだ。そのいのちを災害から守るためには、どのようなことをすればよいのだろう。実際に災害が起こった時に、正しい判断をするのはとても難しい。だから大切なのは、備えることだと思う。そのために、被災した人から話を聞いたり、実際に災害が起こった場所を訪れて、災害のおそろしさや記憶を知ることは、いつかまた必ずやってくる災害への備えにつながると思った。

「私の弟」

私立滝川第二中学校　一年三組　西山　華乃

私には二つ下の弟、翔三と六つ下の弟、恵三という二人の弟がいます。六つ下の恵三は母のお腹の中で脳梗塞を起こして脳性麻痺をもって生まれてきました。生まれて来る時、母はしばらく恵三と入院していました。その時のことはあまり覚えていませんが、母と恵三を父と翔三と迎えに行った時、母に会えなかった寂しさより、恵三に会えてものすごく可愛くて嬉しかったことを覚えています。恵三が成長していくうちに、右側がうまく使えないことが分かり、十カ月の時からリハビリに通うことになりました。そして時々一緒についていくようになり、色んな障がいをもつお友達と会う機会が増えました。目線とわずかに両手が動くだけのお友達、おしゃべりは上手だけど体が動かせないお友達……。でも一緒に遊ぶうちになんとなく気持ちが分かってきました。そしてみんな遊び方は違ったりしたけど一緒に遊ぶと楽しいなと思いました。

恵三が二歳の時、てんかん発作を起こして救急搬送されました。私が小学校に行っている間のことでした。この時、集中治療室にしばらく入院になり、もしかしたらこのまま意識が戻らないかもとお医者さんに言われたことがあります。この時、ショックで母とずっと泣き続けたのは今までもはっきり覚えています。朝笑顔でバイバイをしてくれた恵三にもう会えないかもしれないなんて本当に信じられませんでした。この時初めて、「人が死んでしまう」ということを本気で考えたと思います。とても怖いことだと思いました。幸い、恵三は回復してくれ今は元気です。もう二度とこんな思いはしたくありません。

恵三は今、七歳ですが、まだおしゃべりも出来ず、ずりばいでお座りも数秒しかできません。だけど恵三のジェスチャーや叫び声でだいたい何を言いたいのかは家族みんなわかります。恵三はいつも大きな声で笑っています。泣いたり、怒ったりもよくします。一緒におままごとをしたり、ボール投げをしたり、けんかもします。もう一人の弟、翔三とよく遊ぶ卓球やドッジボールが一緒に出来なくて、一緒に出来たら三人で楽しいだろうなと思ったことはあります。相変わらずてんかん発作もあって、しょっちゅう救急搬送されているので、なかなか家族で遠くにお出かけもできません。他のお友達の家族とはちょっと違うところもありますが、私は気にしません。やっぱり恵三は私の大切な弟で大切な存在です。恵三が笑ってくれるだけで家族みんなが元気になります。時々、あの二歳の時の発作を思い出すことがありますが、本当に今、恵三が生きていてくれてよかったと心から思います。

私は恵三のリハビリの中で、リハビリをお手伝いしてくれる理学療法士という仕事を知りました。それから障がいのある子ども達と遊ぶ保育士さんのことも知りました。将来、どちらかの仕事をしてみたいと思っています。恵三のような障がいのある子ども達に、そしてちょっと助けてあげられる仕事についてみたいと思っています。

「AI・ロボットと人間の関係」

長浜市立びわ中学校　二年一組　八木　梨衣奈

私は「いのち」というものはやはり、生物たちの中にのみ存在していると思う。しかし、今ではAIとよばれる人工知能やロボットなどに「いのち」を感じ、感情移入をす

優秀賞

る人が多くいる。そのことに私は疑問を感じた。

そもそも「いのち」とはどういったものなのだろうか。辞書では「生物の生きてゆく原動力・生命力」「寿命」「一生・生涯」と表現されている。ＡＩやロボットに生命力を感じることはないと思う。それらは生きていないのだから。他の二つも同様に考えられる。では、人々はそれらの何に「いのち」を感じているのだろうか。

この疑問を考えるために、具体的にどんな状況でＡＩやロボットに感情移入をするのか、その場面をイメージしてみた。ＡＩとして一番最初に思い浮かんだのはアイフォンの機能の一つ、「Ｓｉｒｉ」である。このＡＩは普通の検索機能だけでなく、質問に答えてくれたり、歌を歌ってくれたりなどしてくれる。これは人々が感情移入するポイントの一つだと思う。また、犬型ロボット「ａｉｂｏ」の動きも、人々に親近感を与え「いのち」を感じるポイントだと思う。

他にも、ＡＩやロボットはたくさんいるし、人々が感情移入する事柄もたくさんある。現代社会にＡＩやロボットはこんなにも浸透しているのだなと感じた。

具体的な例を考えてみて、ＡＩやロボットに親近感を覚え、感情移入し、「いのち」を感じるポイントには、共通点があることに気づいた。それは、どれもＡＩやロボットの動きを、実際に生きている生物と重ね合わせている点である。もちろん生物には、人間も含まれている。

つまり、人々はＡＩやロボットに直接「いのち」を感じているのではなく、それらを通して見える生物に「いのち」を感じているのである。生物はもちろん生きているのだから「いのち」を感じて当たり前なのである。具体的には、「Ｓｉｒｉ」にはユーモア混じえて話す人間の様子を、「ａｉｂｏ」には愛らしい犬の様子を重ね合わせ、「いのち」を感じているのだ。

ここまで考えて、私はまた新しく気づいたことがあった。昨今、人々がＡＩやロボットに感情移入をすることに警鐘を鳴らすような風潮がある。ＡＩやロボットに依存にすることによって人と人との間の関わりが減り、今までのような社会が形成しづらくなるというのだ。私も漠然とした不安を感じていたけれど、それは杞憂であるかもしれないと思った。ＡＩやロボットに人々が感情移入して依存したとしても、それはＡＩやロボットを通して人間らしさを感じているのである。つまり、人間があってこそ、ＡＩやロボットへの感情移入が生まれるのである。だから、ＡＩやロボットによって人間の関係が疎くなったり、悪化したりすることはないと思う。むしろ、ＡＩやロボットによって始まる人々の関係もきっとこれから増えていくと思う。

ＡＩやロボットを通して感じる「いのち」もきっと悪いものではないと思う。

「わたしの感じた『いのち』」

城陽市立南城陽中学校　二年四組　中野　くるみ

私の祖父は一昨年前に、右足にできた悪性腫瘍を取り除く手術をした。祖父の病気はとても珍しいため、専門医のいる大学病院で、十時間の大手術を受ける。そう聞いた時は、不安と驚きで胸がしめつけられた。手術の成功を信じていても、心のどこかで信じきれず不安になっている自分がいた。だから、手術を終えベッドに横になりながら、弱々しくも笑って私の名前を呼んでくれている、祖父の優しい顔を見た時は、自分でも気づかないうちに涙が溢れ、流れ出て止まらなかった。この時初めて、祖父と一緒にご飯を食べたり笑ったり、今まで特別に感じていなかった、どこにでもあるような家族の風景がとても大切であった事に気付いた。長い人生、いつどんな事があるのか分からないし、昨日まで当たり前だった事が、これから先も必ずあるとは限らない。普段あまりにも当たり前で、忘れてしまいがちではあるけれど、家族で笑いあえる何気ない、ただのありふれた日常の尊さを忘れずに生きていきたいと、強く思った。

祖父が退院してから、もうすぐ一年という夏。予期せぬ事が起きた。手術で取り除いたはずの祖父の腫瘍が転移し、再発したのだ。そこから、まるで階段を転がり落ちるかのように早く病気が進行していった。祖父は一度は入院していたものの、残された時間を、家族のいる住み慣れた我が家で過ごしたいと思っていた。私も少しでも長く、大好きな祖父のそばにいたかった。それを実現させるために、たくさんの方々が連携し、サポートしてくださった。でも私

優秀賞

は、祖父が弱っていく姿を見ているのが、正直辛い時もあった。祖父の事は大好きなのに、どう接すれば良いのか分からなくなって、腫れ物に触るように少し遠ざけてしまっていた。そんな時、祖父の訪問看護師Ｉさんは、「家族みんながいつも通りに過ごしている方が、祖父は喜んでくれる」、と言ってくださった。祖父の命はもうそんなに長くないと分かっていたし、ベッドで寝たきりの生活になる。そう頭で理解していても、心がきちんと受け入れられていなかった。私は、祖父の病に心から向きあえていなかった事に気付いた。それから私は、できる事は自分から手伝ったり、祖父と二人で話したり、祖父の前でも笑顔で過ごせるようになった。

十二月の日曜日。祖父は家族に囲まれ、静かに息を引き取った。祖父は亡くなる間際、一人ずつ家族の名前を呼んでくれた。祖父はもうこの時点で、最期が近づいている事を知っていたかのようだった。私は祖父が亡くなる時、今までの〝ありがとう〟という気持ちだけは伝えたかった。だから、最後に泣きながらでも言えて良かった。

「じいじ、ありがとう。大好きだよ。」

私が祖父の耳元でこう言った瞬間、祖父の目がゆっくりと閉じた。まるで、私の言葉を待っていたかのようだった。その日、駆けつけてくださった訪問看護師Ｉさんは、祖父を見て

「眠っているみたいな、優しい安心した顔をされているねぇ。眉間にシワが寄っていないのは、『この世に思い残すことなく、安心して旅立ちます』っていう印なんだよ。」と、私に優しく声をかけてくださった。それを聞いて嬉しかったし、祖父と家でお別れする事ができて本当に良かったと感じた。たくさん涙は流したけれど、悲しいようで悲しくない、そんな最期だった。最後にＩさんは、私にそっと教えてくれた。

「人が亡くなった姿を見たんじゃなくて、最後まで生ききった、生き抜いた瞬間を見たんだよ。」

この言葉は、私のイメージしていた「死」という、暗くて悲しくて怖いモノとは違い、何か明るくてキラキラしていた。〝生は死の延長にある〟。生と死は一見真逆の言葉のように感じるけれど、限りある命を精一杯生き抜き、「生きる」を全うした先に死があり、「生きること」と「死ぬこと」は繋がっていて、決して別々のモノではないと、私は考える。

「命の尊さ」

野洲市立中主中学校　三年四組　木瀬　奏音

二〇〇六年十二月十日。これは私の誕生日です。そして翌年の一月四日は、私の命が助かった日です。生後二十五日目に六時間もの大手術をしてくださった先生との出会いは、これからの私の人生にとって忘れられない大切な出来事でした。

私は母のお腹の中にいるときから『胆道閉鎖症』という一万人に一人の難病を患っていました。初めに母が通っていた病院では、「生まれたら手術をしないと助からない」とまで言われたそうです。私の母は『大津赤十字病院』という病院に転院し、母は二十一時間もの陣痛に耐え私を産んでくれました。そして私は産まれてすぐにＮＩＣＵという病気や未熟児の赤ちゃんが行く集中治療室に連れて行かれました。私の母は、産まれて間もない私を抱く事なく一時離れ離れになってしまったのです。それからというものの、私の母はたくさんつらい経験をしてきたそうです。まずは、自分の母乳を直接飲ませてあげられなかった事。同じフロアに入院していたお母さん達は、授乳室で赤ちゃんに授乳していたそうです。でも、私の母は自ら哺乳びんに母乳をしぼり、授乳室にある冷凍庫に母乳を預け看護師さんに私が飲ませてもらう。そんな事しかできませんでした。他にも、一日にたった一時間だけの面会時間でしか会えなかったり、ＮＩＣＵまで行ってもカーテンが閉まっていて顔が見れなかったり……など、〝普通の親子の時間〟が私達二人にはありませんでした。

生後四ヵ月の頃は、一ヵ月半もの間退院できない事もありました。この時は母も同じ病室で過ごすことができていたのですが、二日に一回ある採血のたびに処置室の外で私の泣き声を聞いて母も泣いていたそうです。産まれてから痛い思いばっかりさせて、産まれてきて幸せなのだろうか……これ以上痛い思いをさせるのはかわいそうだし二人で遠いお空へ行ってしまおうか……とも思ったそうです。し

優秀賞

かし、処置室から出てきた私を抱きしめ、そんな事を考えていると、泣いていた私は母の顔を見て「うっぺ」と言って笑ったそうです。その声を聞いて、さっきまで泣いていたのに嬉しそうに笑う私の顔を見て、〝なんて馬鹿な事を考えていたのだろう……この子の命は私がずっと守らないといけないのに〟と思ったそうです。

それからNICUを退院した後も、私は入退院を繰り返すことになり、産まれてから今までの十五年間で五十三回も入院しました。

そんなある入院中の出来事です。私の母が突然〝アイウィッシュユーモア～お母さんはね～〟という本をくれました。その本の中にはお母さんが願うたくさんの文章が書かれていました。私はこの本を読み、改めて母の気持ちを知れた様な気がしてほっこりしました。今では、宝物の一冊です。その中に、こんな文章がありました。〝かなしいとき「だいじょうぶだよ」っていってくれるおともだちがそばにいますように〟この文章を読んだ時、自然と涙がこぼれました。私は去年一ヵ月もの長い入院生活を体験し、それは私にとって一番つらかった入院でもありました。そんな時、そばで支えてくれた親友達の姿を思い出したのです。

私は、病気で良かったなって今は心から思います。手術の話も出たり、運動部に入ってはいけない……など、たくさんつらい事もありますが、何よりいつもはあまり気付けない家族、友達が支えてくれている事に気付けたり、人一倍、生きている事に感謝できるからです。

〝生きている事〟それは普通の様で、普通では無い、何か特別な事だと知れた事に、私は何度も〝ありがとう〟を伝えます。

「輝きを、叫ぶ」

京都市立大枝中学校　三年五組　石倉　歩実

人生って、難しいな。だって、生まれたら、あとは死に向かうだけ。どれだけ頑張った思い出も、死んだら消えてしまうのに、この限られた数十年に、何か自分のいのちの痕跡を残そうと、私たちはもがいているのだから。誰もいのちが、叫んでいる。このわたしを輝かせてよ、と。いのちが輝く瞬間とは、いつだろう。輝いている人とは、誰だろう。

数日前、私は日記を見つけた。小五の二カ月間の日常を、みっちり書きこんでいる。遠足や部活動や、大会など、心を動かされるような出来事を、大きく取り上げていた。読み返して、自分への真っすぐな眼差しに圧倒された。自分の言動に対する喜怒哀楽が、散りばめられた日記だったのだ。例えば、三週連続で委員会の飼育当番を忘れ、六年生に迷惑をかけていた自分。無責任さに、激怒していた。「楽してたら、それ相応の失望がある。」はっきりしたその一言が、心に刺さる。問題演習で、完璧な答えを求めて、その場しのぎのズルを続けた自分。「私はいったい、どれだけの人にほめてもらいたいのだろう。」とあきれ、発破をかけていた。また、クラスの雰囲気と自分の行動に、葛藤していた。大会に向けてライバル意識を燃やしていた。陸上部だった私は、二月中に到達すると決めたタイムを、見事最終日に達成していた。

あの時は、まだ十一歳だったのに。毎日を本当に真剣に、生きていた。誰の心にも残らない痕跡だろうけれど、いのちが、輝いていた。たった一つの出来事を大げさに表現していたけれど、それはつまり、いのちの叫びに正直に応えていたからだった。あの頃は、結果は伴っていなかったかもしれない。でも、確かに、素直さを知っていて、過程に全力だった。

今はどうだろう。人生に慣れてしまったのだろうか。無難に生き抜く方法を、見つけてしまったのだろうか。結果は残していても、力を出し切れていない感覚。やるべきことをただ忙しくこなし、本心を隠している。最近の悩みの種、進路選択。これまでずっと、何か足りない、直感的なものがないと、断言を避けている。私は、いのちの叫びから、逃げているんだと思う。心にも輝きたいという希望はあるけれど、その希望に見合う手段がわからないと探し続けるふりをして、正直な気持ちを怖がっている。候補校を聞かれても、「でも、」の一言が必ずついてくる。自分の発

優秀賞

言が、本音として受け入れられるのが気恥ずかしくて、または、意見されるのが怖くて、素直な気持ちを、意図的に覆っているのだと思う。数年前の、いのちの輝きは、どうすれば、取り戻せるのかな。

私も十五歳になり、同年代の子が全国や世界の舞台で勝負している報道は、もう日常だ。彼らの輝きは、頑張りなくして存在し得ないことを分かっていながらも、まぶしく思ってきた。誰にも負けない、魅力的な特技がある人は輝けていいなと、羨ましかった。あの日記を再読した時に大きな衝撃を受けたのは、特別な才能や技を持つ人だけが輝くわけではないことに、気づいたからだった。不器用でささいなことにも悩んでいた、小五の私。でも、輝いて見えたんだ。輝きたいという叫びに、本心に、素直に動いていたから。自分のどんな一面にも、正直に向き合っていたから。

誰ものいのちが、叫んでいる。このわたしを輝かせてよ、と。それは、とても自然なこと。いつでも、どこでも、本能的なもの。輝くためには、きっと。自分の思いを正直に受け止めること、思いに素直に動くこと。

机の上に、木枠のフォトフレーム。小六の私の卒業制作。「未知へ挑戦せよ」と彫った私。そうだ、私は挑戦が好きなんだ。私は、輝きたい、それが本心。一歩、踏み出そう。私の名前は、「歩実（あゆみ）」なのだから。

このいのちの輝きを記憶できるのは、限られた人生の間だけだけれど。素直になろう。

輝け、いのち。

「私と弟と、あとひとり。」

大阪教育大学附属池田中学校　三年A組　秦　優花

私には、弟がいる。7歳も年下だというのに、もう私の胸ほどの身長の、生意気で逞しい弟が。しかし、私と弟の間にはもうひとりきょうだいがいる。いや、いたはずだったのだ。

私が幼稚園に通っていた頃に、唐突に母から言われた。「もうすぐ優花はお姉ちゃんになるんだよ」と。私は、その言葉を聞いた瞬間、飛び上がって喜んだ。なぜなら、私はお姉ちゃんになることに憧れていたからだ。幼稚園でいつも仲良くしていた友達には弟がおり、その世話をしている姿に羨ましさを感じていた。男の子かな、女の子かな。赤ちゃんってどんなものだろう。私は母の言葉を聞いて以来、毎日をわくわくして過ごしていた。そんな気持ちで過ごしていたのは私だけでなく、家中があたたかな雰囲気に包まれていた。

しかし、そんな時、弟か妹かも分からない私のきょうだいの死を告げられた。その日、母は産婦人科に向かった。私は、今日は赤ちゃんについてどんなことが分かるんだろう、とそんなことを考えながら母の帰りを待合室で今か今かと待っていた。ようやく母が帰ってきた。自分のきょうだいについて聞こうとうきうきしていた私とは裏腹に、母の面持ちは暗かった。母は父と少し話し合って、私に言った。「お腹の赤ちゃんね、天国に行っちゃったんだって。ママのお腹のばいきんを食べてくれたらしいの。」

それを聞いて、私は目の前が真っ暗になった。赤ちゃんが死んだ！？だって、この前の検診では元気に動いていたじゃないか！今も母のお腹はちゃんと膨らんでいるじゃないか！だが、私がどれだけ悲しもうとも結果は同じだった。それまで母のお腹で生きていた赤ちゃんは手術によって取り除かれた。昨日まで確かに存在したいのちが今日は存在していない。私にとって衝撃の事実だった。悲しくて悲しくて仕方がなかった。赤ちゃんが亡くなってから何週間かした頃、私は唐突に思った。「確かに存在した私のきょうだいのことを忘れたくない」と。そこで私は、ひとつの考えを思いついた。それは、赤ちゃんに名前をつけてあげることだった。

私は考えに考えを重ねた結果、赤ちゃんを「愛花」と命名した。誰にでも優しくされる花のような女の子になってほしい、とつけられた私の名前にちなんで、誰にでも愛されるような子になってほしかったからだ。

優秀賞

愛花が亡くなってから数年後、再び新しいいのちが母のお腹に宿った。弟だ。愛花は、母の子宮の菌を食べて亡くなった。愛花が命がけで守った母の子宮に、弟のいのちが守られているのだ。私は、愛花が弟のいのちを繋いでくれたように思えて無性に嬉しかった。弟は順調に大きく育っていった。そして、普通の赤ちゃんよりも少し大きな状態で生まれた。その時の喜びは、言葉にできない。私が指を差し出すと小さな手でぎゅっと握りしめてくれる、あたたかい弟の存在が愛おしくてたまらなかった。この小さな手のひらで愛花のいのちを繋いでくれているんだ、と感動した。

当たり前に存在するいのちは、本当は奇跡なのだ。愛花は、そんな大切なことを私に教えてくれた。だから私は、これからも自分やその周りの人達のいのちに感謝して生きていく。ちゃんと見守っててね、愛花！

入選

●滋賀県

「のらねこの命」
草津市立笠縫東小学校　四年　佐々木　麻衣

「命の輪」
大津市立瀬田北小学校　四年　田原　翠乃果

「命の輝き方」
草津市立老上小学校　六年　礒嶋　玲杏

「一〇二年間の綱渡り」
野洲市立野洲小学校　六年　江原　伊純

「ポジティブばあさん」
草津市立志津小学校　六年　木元　りさ

「パチン」
高島市立安曇川中学校　一年　板楠　あみ

「戦争は怖い？」
高島市立安曇川中学校　一年　梅村　煌心

「兄から学んだこと」
東近江市立永源寺中学校　二年　赤松　虹空

「いただきます」
私立近江兄弟社中学校　二年　中島　樺音

「向き合うこと」
私立近江兄弟社中学校　二年　中野　澪

「『いのち』の作文コンクール」
彦根市立彦根中学校　三年　西川　輝

「生きるということ」
大津市立志賀中学校　三年　渡邊　雄天

●京都府

「もう一度会いたいよ」
舞鶴市立中筋小学校　三年　川角　星愛

「守ろう！海の生き物たちの大切な命」
木津川市立城山台小学校　三年　森本　琉奈

「命への向き合い方」
向日市立西ノ岡中学校　一年　天目　千鶴

「明日」
京都市立久世中学校　一年　辻　結那

「伝えたい」
亀岡市立亀岡中学校　二年　植村　彩礼

「命とおにぎり」
京都市立二条中学校　二年　草川　紗里

「小さなリム」
私立立命館宇治中学校　二年　鈴木　春野

「命の賞味期限はいつまでだろうか」
私立同志社中学校　二年　中村　天希

「命」
京都市立七条中学校　三年　大島　悠暉

「生きる理由」
八幡市立男山東中学校　三年　小土橋　穂珠

「今を生きる『いのち』」
京都市立松原中学校　三年　山田　明日香

「たった一つの命　たった一度の人生」
京都市立北野中学校　三年　吉本　美那

●大阪府

「人間もせみも同じいのち」
東大阪市立英田北小学校　二年　森田　蓮

「しぜんと人間のいのち」
大阪市立勝山小学校　三年　中山　潤奏

入選

「命を感じた畑」
大東市立泉小学校　四年　野口　睦央

「私の小さな親友」
私立追手門学院小学校　四年　藤田　愛音

「命はえい画だ」
大阪市立北田辺小学校　五年　音野　アリシア　桜

「いのち」
箕面市立中小学校　六年　寸田　莉子

「空を見つめる」
東大阪市立意岐部小学校　六年　藤塚　穂波

「まだいきているいのち」
寝屋川市立楠根小学校　六年　藤原　夢優

「生きている。だからこそ。」
大阪市立住吉中学校　一年　吉田　花紋

「命には期限がある」
東大阪市立高井田中学校　二年　中西　まりん

「一つのいのち」
大阪市立文の里中学校　三年　笹山　舞

「縁がつなぐ命」
大阪教育大学附属池田中学校　三年　堤　理紗子

「『いのち』の完成」
八尾市立高美中学校　三年　東條　圭剛

「生死の決断」
堺市立長尾中学校　三年　藤岡　花音

「心」
枚方市立長尾中学校　三年　古谷　果鈴

●兵庫県

「ひまわりのやくそく」
姫路市立荒川小学校　一年　妹尾　采杷

「てんしになったおとうと」
太子町立龍田小学校　二年　井川　稜大

「いのちのたいせつさ」
太子町立太田小学校　二年　坂本　皓

「向き合った母の命」
私立甲南小学校　五年　井野上　碧泉

「大切な命」
加東市立滝野東小学校　五年　竹原　琥珀

「初めてわかった命とはどういうものなのか」
加古川市立野口小学校　五年　吉岡　若葉

「今わたしたちにできること」
小野市立河合小学校　六年　石本　迅

「限りあるいのち」
姫路市立香呂小学校　六年　上月　さくら

「今、私に出来ること」
姫路市立船場小学校　六年　田路　桜子

「『いのち』を考える」
私立賢明女子学院中学校　一年　上谷　青樂

「命との向き合い方」
私立小林聖心女子学院中学校　一年　岸添　莉子

「いのちの大切さ」
私立小林聖心女子学院中学校　一年　椹木　彩花

「私にとっての『いのち』」
私立関西学院中学部　一年　長濱　花凜

入選

「ホームレスについて」
福崎町立福崎東中学校　一年　名坂　心音

「気持ち次第」
たつの市立揖保川中学校　二年　沖　希美

「コロナの中のいのち」
尼崎市立小園中学校　二年　川邉　隆之介

「生きること」
尼崎市立小園中学校　二年　松井　秀斗

「二つの漢字が伝えたいこと」
私立須磨学園夙川中学校　二年　木本　望心

「私が守ったいのち」
私立須磨学園夙川中学校　二年　後藤　楓華

「私が感じた『いのち』」
神戸市立有馬中学校　二年　嶋崎　愛弓

「ふつうって何？」
たつの市立新宮中学校　二年　杉本　奈夕

「自分らしく生き抜くために」
私立滝川第二中学校　三年　寺西　礼和

「私のこの目」
三木市立三木中学校　三年　中山　美悠

●奈良県

「いのちのバリア」
奈良市立東登美ヶ丘小学校　一年　石本　新

「命の値」
生駒市立緑ヶ丘中学校　一年　亀井　香子

「命の大切さ」
奈良県立青翔中学校　一年　中山　愛実

「唯一の願い」
香芝市立香芝東中学校　三年　米川　昊志

●和歌山県

「いのち」
私立智辯学園和歌山小学校　二年　川西　結子

「人間と動物」
私立智辯学園和歌山小学校　三年　宮本　旬

「おばあちゃんの入院」
私立智辯学園和歌山小学校　四年　佐藤　愛美

「終わりのない『いのち』」
和歌山市立日進中学校　三年　川村　美結

選考を終えて

前年に続いて新型コロナウイルスに翻弄された２０２１年、小学生や中学生の皆さんにとっては2年連続のコロナ禍になってしまった。

大変だったよね、わかるわかる……なんて、オトナが勝手に言ってはいけない。なぜって、同じ歳月でも、最年長の中学3年生でさえ15歳という皆さんにとっての2年間は、僕たちオトナより（ちなみに僕は２０２２年3月で満59歳になります）、ずーっと比率が高い。なにしろ、小学1年生や2年生にとっては、いままで歩んできた人生の約4分の1がコロナ禍という計算になってしまうのだから……。

でも、だからこそ、皆さんがこの時代に考える「健康ってなんだろう」「病気ってなんだろう」「生きるってなんだろう」「死んでしまうってなんだろう」……そして「いのちってなんだろう」の問いは、すごく大きくて、深い。

作文、みんなよかったよ。コンクールだから選考をしなくてはいけないのだけど、ほんとうは、いのちに優劣がないのと同じように、最後まで作文を書いてくれた、いのちについて考えてくれた、それだけで、もう、応募してくれた全員に大きな拍手を贈りたい。

よくがんばったね。そして、ありがとう。

最終選考会の席上、ある委員が「これを見てくださいよ」と言った。最終選考に残った作文の、原稿用紙に染みがついている。「この子はきっと、泣きながら、作文を書いてくれたんです！」——僕もそう思った。

作文の技巧も、もちろん大事だ。でも、それ以上に、「熱」を重んじて、最終選考委員会は作品と向き合った。その結果が、冊子としてまとめられることは、とてもうれしい。そのうえで、繰り返すけど、肝心なのは応募総数。いのちについて作文を書いてくれた人が、こんなにたくさんいた、しかも毎年増えているということが、ほんとうは一番うれしいんだ。

あらためて、ありがとうございました。ご家族や学校の先生方にも、心からの感謝を捧げます。

最終選考委員会　委員長　重松　清

最終選考委員会　委員長　重松 清
副委員長　菊池 省三
委員　柏木 哲夫
委員　坂下 裕子
委員　丸川 征四郎

表紙・カットイラスト　永田 萠

2021年度　小・中学生

「いのち」の 作文 コンクール 作品集

2022（令和4）年1月発行

編集・発行　公益財団法人 JR西日本あんしん社会財団
〒530-8341　大阪市北区芝田二丁目4番24号